

ミネソタ便り

2005年5月27日 12:05

ミネソタ便りのみなさまへ

今年度の学校は5月27日の金曜日で終わりました。3ヵ月後に、また会いましょうね、と言って生徒、先生、職員、父兄は、それぞれ別れていきました。

当校の生徒たちの夏期休暇への入り方を見ていると、全員が転校生であるかのような錯覚に陥る風景です。もっとしっかり観察しますと、本当に、一旦別れるのです。学校生活に別れを告げるのです。そして、それぞれが、それぞれの旅を持っているかのような表現をし合うのです。日本で言えば、転校生別れの風景です。そして、その光景は、20日から一週間、急に鳴きだした蝉しぐれです。

こんな風景は、私の過去の学校生活ではありませんでした。それほど長い期間休むのですね。でも、長い間休むからだけではないようにも見受けられます。アメリカの他の地方のことを知りません。これは、ここだけかもしれません。

次のように、鳴きあっています。半年以上もの間、厳しい冬を過ごすには、個性ある生活は諦めて、みなで協力し合いながら同じような学校生活をしましたよね。きちっと、お互いの取り決めを守りながら。それに、学校生活と教会行事の共同生活で、お行儀良く過ごしたわよね。それが一番無難よね。そうでした。そうでした。そのかわり、夏休みは別よね。一旦別れて、みんなで、個性豊かに過ごしましょうね。そして、お互いに大変身しましょうね。あなたは、どんな計画をもっているの。そお。今度会うときは、びっくりし合ひましょうね。そうしましょう。そうしましょう。生徒や先生同士、そう鳴きあっているように、私には映りました。私は、ただ、脇でみているだけで、このしぐれの中には入れませんでした。

よそ者の私、自然環境と気象条件に恵まれて育った日本人の私には、何故か、哀れな蝉の集団をみているような、妙な優越感を感じてしまいました。ごめんなさい、こんな表現をして。日本語だけにしておくので、許してください。でも他人事ではない。私も3ヶ月間、休まなければならないのです。慣れないことなので、正直言って戸惑っています。この期間で変身しなければ、また、ひとりだけ取り残されるような、変な圧迫感を、この別れの風景から感じてしまったのです。

そうだ、旅に出よう。一旦 Crookston とは別れよう。そうしなければ、仲間はずれになってしまいそうに思う。私の夏期休暇への入り方は、蝉に追い出された渡り鳥でした。

続・ミネソタ便り 13 です。今回は、旅に先立ち「言葉という青い鳥をさがして」をお届けいたします。よろしかったら添付ファイルを開いてください。(以下本文)

『言葉』という青い鳥をさがして

周辺の雰囲気には圧倒されながら、自問自答の結果、夏期休暇は、旅に出ることにした。五つの車輪を持った馬車に乗って。その経過で、また思い出した。懐かしい日本のことわざを。

屋上、屋を架す。That's like putting a fifth wheel to a coach. 英語では、これを、馬車に五つ目の車輪をつけるようだ、と譬えるらしい。これは、表現は違うが、同じことを発見しているのだ。日本人と欧米人で同じ「言葉」を認識しているのだ。生活で見ているものは、家屋と馬車と全く違うが、同じ「言葉」を双方で観ているのだ。ことわざは、見えない心をしっかり捉えている。

もともと旅に出ているのに、旅で Crookston をなぜ離れなければならないのか？ 屋上、屋を架す。のか？ この地の人々の夏の過ごし方を観察するつもりではなかったのか？ これから旅先で、私は Crookston から

来ました、というのか？ こちらの人は、外人という意識が薄いので、この変な日本人の下手な表現の旅の理由を理解するのに苦労するだろうなあ。でも、旅もしてみたい気持は、大いにあるな。と自問自答しながら旅立ちを決めた。そして、旅に出るための最低の目標として、『言葉』について考えながら旅をすることにした。ミネソタ便りのいままでの流れから、このテーマは是非ものだろう。それに加え、折り返し点を過ぎた今、ある心境がそれを後押しした。

正直に申し上げる。実は、ミネソタの旅を終え、日本民族言語の世界に戻るのが怖いのだ。会話に不自由しなくなると、いまのようなしつこく考える習慣がなくなってしまうような気がする。そう思うからだ。これが一番大きい。本当だ。同じ言語を使いあい、気のおけない仲間といると、考えないで時を過ごしてしまう。来るときには、考えもしなかった不思議な心境の変化と恐怖感だ。

悟り願望のお坊さんが、独りになりたい気持の部分だけは、やっと、分かったような気がする。

私が教室に遊びに来た4年生以上の生徒たちを相手に、半分からかいながら、あと半分は、会話の勉強をしながら出す問いかけがある。水平思考の大切さと、もしかしたら、水平思考ではなく本ものかもしれないという不思議な魅力を持つ質問だ。もちろん、授業ではない。1プラス1の「最も正しい答」を出しなさい。

そして、次に、1プラス1の「最も間違った答」も出しなさい。最初の答を2と言ったら、アメリカ流に「あなたは賢い」「おまえは天才だ」と大げさに褒め称える。そして、次の答えは？ とゆっくりと言う。

小学生だから、無限大という概念は、まだ教わっていない。だから答え方が面白い。楽しめる。

無限大を知っている、少し賢さに自信のある中学生以上の大人は、トンチだと思い、ほとんどが次のように答える。マイナス無限大だ、と。なぜならば、プラス無限大より2だけ間違いが大きいからと。知識、知恵の世界では、50点の答だ。まだ、無限大の概念を理解していない。しかもトンチではない。真面目に考え、もう少し賢くなると、答はない、と答える。合格点だ。だから、中途半端な大人の答えは、面白くない。楽しめない。哲学の世界では、その答えは0点だ。まだ、なにも発見していない。考える習慣をもっと大切にして欲しいものだ。

小学生は、正直だ。答がたくさんあって困ると、うれしそうにいう。これ以上もっと大きな数を数えるには、どうするのかと、真剣に聞いてくる。GradeによってHundred thousand以上の数え方を聞いてくる。

すでに数の概念と、間違えると言うことの程度の差を発見している。下手に教えると担任のセンセイから怒られるのでMillionやBillionの単位は教えない。もちろん、無限大も教えてはいけない。無限大は自分でも実感がない。また、教える必要もない。

そして、答えは2だよ、と教える。きょとんとしている。しばらくして、2は正しい答でしょ、という。そうだよ、と答える。なぜ同じなの？ でとまる。しかし、真剣な表情だ。発見しようとする初々しさだ。それが頼もしい。すでに哲学者の顔をしている。これを算数の問題だと思った？ と質問する。そうだと、間違えなく答える。センセイは一言も算数の問題だとはいっていないよ。よく、観てご覧。算数の場合だとmistakenを使うけど、白板には、wrongと書いたでしょ。しかもmostも付けたでしょ。センセイは、算数の問題のつもりではないよ。

どう違うの？ という。もう完全に催眠状態だ。ここからの説明が、うまくゆく場合と、お手挙げの場合がある。私の会話力の問題だし、訓練の場にもしている。ほんとうに賢い子は、最後には分かってくれる。しかし、分かってもらえる確率は、とても低い。何回やっても、うまく行かない。難しい。分かってくれた子を、いけないと思うが、それ以降、特殊な目で見てしまう。

日本民族の言語だと、簡単に説明できる。2は正しい答だ。2以外は全部間違った答だ。間違い方の程度に差があるだけだ。数で答えるより、数字以外で答えたほうが、もっと間違っている。たとえば、答えは、花とか猫とかケーキとか。しかし、これもどれが一番間違っているか、だれにも分からない。答がますます分からなくなる。

なぜだろうか？ 間違えようとするからだ。正しい答を出した方法と同じように、間違っただけを出そうとするからだ。最初の問題に誘導されている。最初の問題と次の問題では、全く質が違っていることに気付かないからだ。間違っただけを出せ、というのに、正しい答を出すことほど、間違っただけではないという『言葉』に気付かないからだ。答えはひとつである。答は2だ。意地が悪い。気がつかないとわかるときながら楽しんでいっている。こどもは、なんでもすぐ担任のセンセイに報告する。一度、女のセンセイが確かめに来た。センセイに説明した。さすがだ。下手な説明でもすぐわかってくれた。そして、生徒より、センセイのほうが面白がってくれた。それ使わせてくれ。いいか？ という。もちろん You are welcome.だ。

ここが日本と違う。アメリカで、最も私の好きな場面だ。際どいところで、まず楽しんでくれる。社交と大人の対応を知っている。問題提起は、後回し、後日にしてくれた。問題提起とは、この場合、こどもに対する、私の説明力の貧困さであった。教育現場のプロは、流石だ。白紙のこどもに筆の入れ方を知っている。私の筆の入れ方は、風呂屋の看板描きだ。会話の勉強より、もっと大切な勉強を教わってしまった。ミイラ取りがミイラになってしまった。

なぜ、こんな話をしたかという、民族の持つ言語も同じだと思ったからだ。ある心象を発見し、認識するためには、生まれてすぐ「すりこまれた」民族の言語を使わないとできないように育てられている。これを使わないと認識できない。これを使うのが「最も正しい答」であろう。これしかない。しかし、本ものを発見し、認識するのに、「最も間違っただけの方法」は、と言われたら、迷わず、民族言語を使うことだと、いまの私は答える。なぜかと言えば、発見したり、認識したりする基本動作を、まず省略してしまうからだ。せっかく、本ものを感じたり、発見しかかったりしているのに、安易に、すりこまれた辞書から検索し、『言葉』のつもりで民族言語を取り出し、使ってしまうからである。

考えようとしなさい。神とか、宗教とか、生命とか、死とか、本能とか、すぐ言語がでてくる。他の言語に言い換えのできる、他の言語でも説明のできる、先に進まない民族言語群で表現してしまうのだ。そして、もっとも決定的なことは、これで納得してしまうことだ。これは、諦めと同意語だ。民族言語は、そうなるよう実用的にできている。考えるためのものではない。日常語だ。私が使いたい『言葉』とは、ここでは、人類の共通の言語とさせていただきます。まだ、ほとんど形になって持っていないものだ。一部を除き。

人類が形として持っているのは、それぞれの民族言語だ。おそらく百を超えるであろう。私は、あえて、これを『言葉』とは言わず、言語と言っておく。たとえ、ヘブライ語であろうと、ギリシャ語、ラテン語、梵語だろうと。宗教の教典で使われているものであると。般若心経にはちょっと気の毒だけど。繰り返すが、生まれてすぐ、この民族言語で「すりこみ」が行われる。すべての認識は、この民族言語を媒介として行われるよう教育される。民族言語の範囲でしか発見、認識を行わなくなる。考えようとする働きが止まってしまう。

人類は、本来、共通の『言葉』を持っているのだ。どんなところで生まれようと、どんな環境で育とうと、教育があろうとなかろうと、正確に、間違えることなく、共通の『言葉』を知っているのだ。具体的に示そう。どんな人でも、正確に、間違いなく、発見し、認識している言葉だ。これは、他人と確認したり、記録に残したりしなければ、民族言語は使わないで済む言葉だ。つまり、欲がなければ必要のないものが、民族言語と言える。もちろん、欲に関係することの方が多いため現実には是非ものだが。

まず、分かりやすいところから確認すると、五感が知っている言葉だ。その一つ、視覚が知っている七色だ。日本民族の言語で言えば、赤から紫までの七色だ。民族言語を知らなくても、赤を指して、これと同じものはどれかと聞けば、間違えることなく、すべての民族が、同じものを指す。まだ共通の形にはなっていないが、知っている言葉だ。視覚は、その他たくさんの言葉を知っている。絵画、映像、舞踏、演劇などなどの世界は、民族の言語の部分を除けば、あとは、全部人類共通の言葉だ。

聴覚の7音階と絶対音感も同じだ。これは、楽譜という共通にできそうな言葉を持っている。不思議と視覚と同じ七つだ。音楽こそは、民族言語の要らない共通の世界だ。ひとつで間に合う。味覚は、日本民族の言語で言えば、まだ、甘い、苦い、辛い、酸っぱい、の4種類ぐらいいしか発見していない。人類の進化が飛躍するため、もっとひろげなければならない。これからの世界だ。せめて七つにしたい。料理の世界に言語は要らぬ。進んでいる。しかし、欲を満足させていることに偏っているところが問題だ。本来の目的に戻そう。動物のように、食べてはいけないものに敏感になるまで進化しよう。薬が要らなくなる。病気が少なくなるだろう。

嗅覚は、かなり高度な機能で捉えてはいるが、ほとんど発見まで進んでいない。今後、一層の努力の必要な世界だ。目標は、まず七つだ。犬など動物に教わろう。そして、臭いで物を探せるまで進化しよう。物のあり場所などを、頭で記憶したり、考えておくのはもったいない。あたまは考えるために使おう。触覚は、かなり発見が進んでいる。触感、痛感、温度感、圧迫感、位置感、立体感、振動感など広く発見され、一部、具体的な言葉になっている。五感の言葉は、自然科学ですでに使われている。

以上、五感の世界は、五感周期律表を作って励めば、かなり言葉の発見が、今後進むであろう。もともと狂うことのない正確さで知っており、持っている言葉であるから。しかも、無限に存在するものの中から間違いなく、発見してくるものばかりだ。ここまでは、動植物の世界とも共通する部分が多い。動植物とも会話ができる世界だ。すでに、自然を相手に仕事をしている多くの人たちは、会話をしている。当家のジョンウエインなどは、人間と話しているより、庭や畑の植物と話している時間のほうがはるかに多い。彼には民族の言語は、ほとんど不要のようだ。

それ以外に、人間が発見し、認識し、それを元につくった言葉がある。ほとんどが、宗教創造期以降の自然科学の世界がつくったものだ。理性の世界だ。自然科学とは、新しい人類の言葉づくりをしているのかもしれない。まず、数字と記号。それを元につくった数式。次に化学記号。それを元につくった化学式。それとニュートンの法則に代表される、表現がシンプルな法則式群だ。これらは、人間が発明し、つくった人類共通の言葉だ。これらは、人類だけが、認識した「体細胞の死」。その発見からの恐怖感。それを解決しようと精進し、発達したのが理性の世界の産物だ。その理性が発見し、認識した言葉だ。それを元に、作りだした言葉群のはずだ。

この「体細胞の死」の恐怖感は、他の生きものにはない。人類固有の進化を促す重要な動機となるものだ。そして、この動機は、体細胞ではなく、38億年前から、死ぬことがなく、途絶えることもなく、バトンタッチが行われている、生きものの生殖細胞に、進化の嘆願書という遺書で伝えられてきた言葉である。そして進化が認められ、本来、太陽が燃え尽きるまで、変化して終わる一世代の細胞だ。あと50億年のドラマの主役だ。生殖細胞は、生きものが若いうちしか体内に滞在しない。成熟し終わり、体細胞だけになった人間の体内にはいないのだ。だから、年寄りの知識や知恵(民族言語)を哲学(人類共通の言葉)に戻し、若いものに伝え、生殖細胞のポキャブラリーが不足しないようにしなければならないのだ。生殖細胞を持っている年代の若ものだけでは、この遺書遺しのテーマは荷が重すぎる。これをほんとうの教育というのだろう。

生殖細胞を使って、精子と卵子が受精することを、生きものの進化への選挙と言いたい。進化への投票権は、生きものすべてが持つ大切な参政権だ。使わなかった生きものは、38億年の大樹の幹には参加せず、枝葉で終わり、その代で終わることを選んだ生きものだ。幹ばかりでも困る。枝葉も大切である。選択は自由だ。棄権の哲学もあるかもしれないからだ。現に、生殖細胞の使用を拒否する特定の宗教の祭司たちや僧侶たちのように人口激増を自ら制御している奇抜な人たちもいる。しかし、偏らないで投票率を上げたい。そして、人類の進化に反映したい。

どうやら、この進化の嘆願書は、人類共通の言葉でしか受理されていないようだ。民族言語は、下書き用の言語だ。体細胞が使ってきた言語のようだ。言語はいくつあっても仕方ない。しかし、ひとつしか許されない人類共通の言葉、生殖細胞が使う言葉の発見をもっと増やすべきだ。これを増やさないと、嘆願書の質が向上

しない。人類の進化が行われぬ。進化どころか、退化していると言う学者もいる現状だから。

また、長くなってしまった。同じような内容が般若心経に記述されていたような記憶がかすかにある。参考、般若心経と断っておく。ようするに、この『言葉』のことを思い浮かべると、考え続けることが、いまはできるのだ。だから、言葉をさがして旅をすることにした。それが言いたかった。本は、童話ではなく、戯曲として書かれた原作「青い鳥」一冊だけを持って。

5月27日 書き終わったら、旅支度をする気持ちがわいてきた。 平野 茂樹